

形板の刻線パルスで太陽時計をラッチし、時刻信号を取り込む。(7) 180°反転: 必要刻線数を計数した時点で、トラッキングを中止し、180°反転円筒を回転させる。回転時間は、約7秒である。この間に、平行平板はリミット位置まで回転し続け、星は定高度を通過する。(8) 後半観測開始。(9) 後半トラッキング。(10) データ集録: 1星の観測が終了すると、その時点の気象要素(温度、気圧、風向、風速等)や関連データ(ペンジュラム位置変位量、TEM レベル出力等)が集録される。又、ETD 信号のデータ処理を行い、星像バイセクションの補正量を求める。

使用するミニコンピュータシステムは、テキサスインストルメンツ社の DS 990、モデル 4 である。

6. おわりに

この坪川式全自動アストロラープの器械設定誤差は、

$1''/1000$ まで小さくすることができる。2枚の定高度反射鏡の交角を変えた2基の異なる定高度アストロラープを同一地点近傍に配備し、同一星の東西それぞれ2高度通過時刻観測を行えば、経緯度及び観測星の赤緯及び相対赤緯を共に決定することができる。VLBIの光路差を決定する式は天頂方向ベクトルと星の方向ベクトルの交角の余弦を求める式(天文三角形)とは形式的に一致する。VLBIでは同一星の位置を数個観測し、観測地点位置及び星の視位置を同時に決定することができる。上記の方法は原理的に同一の決定方法であり、VLBIの方式にいささか遅れをとったと考えざるを得ない。またこの観測システムをいろいろな緯度帯に配備し基本星系及び電波源の光学視位置の精度向上に貢献することができる。

現在、インターフェイスの改善、プログラムの作製、予備観測を行っている。

日本学術会議第81回総会報告

日本学術会議第12期最初の第81回総会は、1981(昭和56)年1月20, 21, 22日の日3間、本会議講堂で開かれた。

第1日は、定刻9時30分開会。直ちに会長、副会長選挙に入り、会長に伏見康治第4部会員、人文科学部門副会長に岡倉古志郎第3部会員、自然科学部門副会長に塚田裕三第7部会員を選出した。

午後は、第12期の活動を円滑にするための予備的検討委員会の報告が行われた。その後各部会を開き、それぞれ部長、副部長、幹事を選出した。

第2日は、15時すぎまで第11期の経過報告にあてられた。伏見会長は、前期の本会議の活動について所感を述べ、総合的な科学技術振興策樹立の必要を強調した。つづいて運営審議会付置各委員会、各部、各常置委員会、各特別委員会から経過報告が行われた。各報告とも、特に80数名の新会員を念頭において、学術会議全体、各部、各委員会の性格や活動をうきぼりにする配慮の下で行われた。なお、第12期への引継ぎ事項等も報告された。その後各部会を開き、第12期の活動計画等について審議した。

第3日は、まず「第12期活動計画委員会(仮称)の設置並びに各種委員会の当面の措置について(申合せ)」が提案され、運営上の問題等について意見が出されたのち、原案を可決した。

つづいて第12期活動計画に関する自由討議に移った。学術会議の活動の基本的なあり方については、総合的・学際的とりくみ、個々の科学者との連繋、長期的展望をもった継続性の必要等が強調された。さらに学術会議の組織・運営上のたてまえとしての自主・民主・公開の重要性等が指摘された。それとの関連において第12期に具体的にとりあげるべき重点課題として、人文・社会・自然科学の総合的発展の方策、都市問題、平和問題、福祉問題、学問体系の現状の洗い直し、学術情報生産流通問題、発展途上国との学術協力問題、教育問題、学歴社会問題、国公立大学問題、婦人科学者問題、食糧問題、原子力問題、沖繩問題等々が、新会員を含む30数名から提起された。

さらに第12期活動計画をめぐる討議の一環として、第80回総会において採択された「工学技術振興の方策を早急に講ずることについて(要望)」について説明があり、これをめぐって種々の質疑、意見がかかわされた。

総会終了後、各部会をひらき、第12期活動計画委員会の委員の選出などを行った。引きつづいて第1回の第12期活動計画委員会を開いた。

こうして第12期の活動が始まった。会員の出席率は、第1日97.6%、第2日95.7%、第3日93.8%であった。

(日本学術会議広報委員会)